

本城 昇 (埼玉大学名誉教授、埼玉大学有機農業研究会顧問)

関家 ひろみ (呉かみしばいのつどい代表・子育て支援ボランティア)

地域の暮らしや出来事を語り継ぐことは、人間がその地域の自然や人々を大切にしていることを伝える上で大変重要なことだと思います。

地域の暮らしを記録し、そこで生きた人々の大切にしている思いを後世の人達に伝え、後世の人達はそのことを知って、その優れた知恵や思いを暮らしに生かし、自分たちの社会をいのち輝く、心輝くものとしていく。その生き生きとした動きをつくり出すことこそ、今求められていることだと思います。

そして、その動きをつくり出すにあたって、紙芝居は、大変優れた役割を果たすと思います

このセッションでは、具体例として、まず呉の空襲をとりあげ、その後、田中正造・東京大空襲・福島原発事故をとりあげ、考察を進めていきたいと考えています。

・平和をたくす紙芝居—ふうちゃんのそら—

紙芝居実演者：中峠 房江

(原案 中峠 房江、脚本・絵 よこみち けいこ、

監修 呉かみしばいのつどい)

この紙芝居の主人公・ふうちゃんこと中峠房江ふさえ)さんは、「人形劇あひる座」で、地域の子どもたちに40年以上、人形劇を演じてきた元氣ばあちゃんです。

ふうちゃんが7歳のとき、日本は戦争をしていて7月1日の呉大空襲で、大好きだった町も父命からがら生き延びたのです。これまで自身の戦まわりの方や小さい子どもたちに語ってこられて「空襲の体験を通して、平和な子どもの未来にせる紙芝居を作りたい」という長年の思いを形にしたのが『ふうちゃんのそら』です。

脚本・画を担当した地元・呉市在住の紙芝居作家よこみちけいこさんと、呉かみしばいのつどいの仲間とで、何度も話しあい、演じあい作品が仕上がりました。

紙芝居は、花火大会の夜、おばあちゃんが孫に当時の体験を語る場面から始まります。空襲の記憶から花火の音がこわいおばあちゃんの手を、孫がぎゅっと握りしめ「だいじょうぶよ」と寄り添う場面で終わります。戦争の怖さや悲惨さを表現するだけでなく「引き継いでいくこと」と「命をつないでいくこと」を子どもから大人まで伝えられる作品になるよう、心をつくしました。



ふうちゃんのそら第1場面

(なかたおくさんの子で明るいおきました。それも奪われ、争体験をした。そして希望をたく



保育園での実演風景

■地域への広がり

昨年7月1日、ふうちゃんが逃げ込んだ防空壕跡地での慰霊祭で、紙芝居『ふうちゃんのそら』を演じました。近所の保育園の子ども達も参加しました。その日から、保育所・幼稚園、小学校や児童会、大学、おはなし会や図書館、老人会や高齢者施設など約60カ所以上で演じる機会をいただいています。

紙芝居『ふうちゃんのそら』は、2歳の子どもから観ることができます。小さい子ども達は、紙芝居を観終わると中峠さんのところに来て「ほんまの話じゃったん？」と聞きにきます。涙ぐみながら、一緒に観ていたお母さんが「子どもから戦争のことを教えてと言われて、どう話したらいいか悩んでいました。私達の住んでいる呉でも、空襲があったんですね」と話されました。私達は、できれば子ども達だけでなく、若い世代のお父さんやお母さんにも一緒に観てもらえるようお願いをしています。

小学6年生からは「戦争は悲しみだけが生まれてしまうと思った。明日と未来が平和になるために、私もできることはなんでも頑張りとおし、みんなで世界を平和にしていきたい」と感想がありました。

中学生からは「私もいつか、この紙芝居を伝えていきたい」と、手紙が届きました。

高校の放送部は『ふうちゃんのそら』を題材に、ビデオメッセージを作成し全国大会に出場します。

高齢者の方々は、「初めて自分の話をするんじゃが…」と、呉空襲の体験を堰を切ったように話しはじめられ、「これを孫に観せたい」と言ってくださいます。

この紙芝居が、世代を超えて人と人をつなぎ、次の世代へと手渡っていくことを願っています。

いつも あたりまえのように広がる空。

この空を みあげることすら こわくて こわくて、

いつも下を向いて ふるえている子どもたちが たくさんいた、

そんな時代がありました。

ふと 空を見上げて「ああ、きれいだなあ、きもちいいなあ」と思う、

このあたりまえのことが とても幸せな ことなのです。

(『ふうちゃんのそら』からの抜粋)

「ふうちゃんのそら」を作った想い

よこみちけいこ (第21回紙芝居サミットで発表)

～私は呉で生まれて、呉で子供のころを過ごしました

それなのに、「呉の空襲」について学校で学んだことも、周囲から聞いたこともありませんでした。

子供のころは広島に住んでいるということもあって、原爆の恐ろしさについて何度も何度も教えられたことだけ、覚えています。

大人になり、長女を出産したころに、地元のタウン情報誌で、連載をしてみないか？という話がありました。

それは戦前の活気あふれる呉の街についての記憶を残したい、と書かれた本を原案に、絵童話を描いてみないか？というものでした。

本の最後に、「呉の街は空襲で丸焼けになり、何もかもなくなった・・・

それでも、またみな前を向いて生きていく」というしめくりでした。

この絵童話を描くために、はじめて呉の歴史、とりわけ空襲のころのことを調べました。

調べるうちに、これまで自分が住んでいるところなのに、何も詳しくしらなかったことに、愕然としました。

そういう興味すらなかったからです。

子供が生まれて、これから娘に聞かれたときに、自分が住んでいる町について何も答えられないようでは、親として恥ずかしいと、思ったのです。

いつか、この呉の空襲をテーマにした絵本をもう一度、きちんと正面から取り組んで描いてみたいと、心に決めました。

そして、子供が小学校に入学し、帰宅してきたある日

「今日ね、学校でお目目をつぶってきたのよ」と言いました。

その日は7/1で呉で空襲の慰霊の日。町にサイレンがなるので、1分間の黙とうをささげるのです。

「どうして目をつぶったのか、わかる？先生のお話しあった？」と聞くと、

「ううん、よくわからんけど、目をつぶってきたよ」と、ケロっとしていったのです。

そのときに、「学校で教えている先生すらも、この日のことをうまく子供たちに伝えることができていないんだな」と、知りました。

こういった経緯から、「いつか、子供たちにも伝えることができる、呉のお話しを作りたい」と、強く思うようになりました。

そして、その「いつか」がやってきました。

中峠さんと関家さんと出会い、「ふうちゃんのそら」を描くことができました。

今、地元の小学校のあちこちで「ふうちゃんのそら」を子供たちが見せてくれています。

この作品が、子供たちに地元のことを知ろう、知りたいというひとつのきっかけになって

また次の世代に、伝えられていけばいいなと思っています。～